

大海に浮かぶ夢と放射能の島々

——文学者と民族運動家のはざまにいる者の幻想——

シャマン・ラポガン

(李文茹訳)

私がまだ幼かった頃、両親、家族、部落そして私が住む島は、浮動してやまない世界、回り続ける地球について教えてくれた。それを私は「大海に浮かぶ夢」と呼んでいる。

今日は、「文学者と民族運動家のはざまにいる者の幻想」と題した話をさせてもらう。第二次世界大戦後に生まれた私にとつて、大人になるとは漢民族になることであつた。のちに一人の民族運動家、さらには伝統生活の実践者に転向することになった。また、海洋文学の創作者として世界のあちこちを行き来し、自分の見聞きし、感じ、経験したことを種々な民族の人たちに誠実に語ってきた。これから私が語るのは、そうした経験を踏まえた話である。

一

私が生まれた時分、小さな島にすぎない蘭嶼ランシュには電燈もなか

つた。光の届かない茅草小屋で産声を上げた私を、父は乾いた茅草で包んでくれた^①。三番目の子どもとして生まれた私の上には二人の兄がいたものの、相次いで亡くなつていった。母が私にかけた初めての言葉、すなわち私が生れて初めて耳にした言葉は「火」(agoy)、木材を燃やす「火」(agoy)である。三歳の時、父は八七年の生涯において三隻目となる伝統的な船、タオ族の言葉でタタラ (Tatala) と呼ぶ船を造つた。私は、タタラを完成し進水させる時、海辺まで連れていつてもらつた。父が両の手で船を漕ぎだすあの日は、のちに洋々たる海原を旅する夢を私に開いた「試運転」でもあつたといつてもよい。

一九五七年一月、生まれてひと月が過ぎた私を、祖父はどうか無事に生きられるだろうと判断した。家族の愛に包まれるなか、父は太陽の昇る東に向き、私を抱き上げ、お前の名前は「Xi Jaganus」だと告げた。それは「強健たる子ども、島を捨てて

はならぬ子ども」、つまり健康であれという意味である。命名式では、首に青い数珠のある麻縄をかけられ、祝いの言葉、病いに負けるなどといった儀式の文句が唱えられた。一九八六年、私が父になった時、両親が望んだのと同じように伝統的な命名式を行った。私のシヤマン・ラポガンという名前は、ラポガンの父という意味である。息子の命名式は私にとつても、漢民族的な名前を棄て去ることを意味する誇らしいものであった。私は自分の名前「Syaman. Rapogani」をそのまま中国語を当て字にして使うことにした。

私の命名式の後、祖父は私を抱き上げ薄暗い茅小屋から出ると、東の水平線と曙光を指さして言った。「あそこは私たちが船で迎りつくことのできない水平線、毎日太陽が生まれる場所だ」。「水平線、毎日太陽が毎日生まれる場所」という言葉は、私や生まれるタオ族の子どもにとつて最初に耳にする民族の言葉である。

二

私の家族は、この惑星における最も本質的な構成要素について教えてくれた。火、海洋、太陽のことである。水平線をめぐる祖父の語りは、この浮き世における「人生夢魂」（人生という夢・魂）を着実に教え、それでも語り尽くせなかつたであろう「海洋の遣伝子」の部分は、民族の言葉を覚えてからの私の心の奥底に深く刻印された。そのためであろうか、島を離れたり戻ったりといった移動の儀式を通して、私はタオ族と漢民族それぞれの異なる価値観のあいだを徘徊することとなった。「夢・魂」の移動を通し

て、ぼんやりとではあつたが、この小島の人間の運命を追いかけていた。歴史的な説明から言えば、大航海時代には多くの小島がいつの間にか帝国の植民地とされ、さらに第二次世界大戦以降、これらの島は西洋の科学者、軍事家、政治家、覇権国家にとつての実験の場所となり、核兵器、核実験、核廃棄物といったゲームが行われる場所ともなつた。私はそれを「不幸な島」と呼ぶ。伝統的な信仰においては、島にも生命があるとされているからだ。

一九七六年、高校三年の時の私の成績は、当時の国民党政権下において国立師範大学に入学可能な資格を満たしていた。大学統一試験を受験せずに師範大学に進学できるばかりか、食事代、下宿料、生活費もすべて政府から提供されるという恵まれたものであつたが、唯一の条件として課せられたのは、卒業後、島に戻つて学校の教師になることだつた。今では当たり前のように言われているが、ここで行つていた「教育」とは、漢民族の学校教育を非漢民族に押しつけ、原住民の子どもたちを漢民族化させるような、原住民の伝統的な価値観を「解体―再編」するものであつた。

一九歳の頃の私は、直感的に夷を以て夷を制す「御用教師」になることを、師範大学に進学して原住民の中学校で教師になることを拒否した。だがその代償として、（訳者注：八〇年に台北の淡江大学フランス語文学科に入学するまでの）四年間、台湾本島の西部や北部で労働者となつて自らを養い、自分の民族とは縁もゆかりもない都会生活に慣れるように自らを鍛えねばならなかつた。そうした暮らしは、祖先の島、両親への思いを募らせるばかりで、涙で顔を洗う辛い青春の日々でもあつた。

一九七七年夏、台北で、蘭嶼に台湾電力による核廃棄物貯蔵所が建設される事を初めて知った。それを聞いて真つ先に思ったのは、中華民国の漢民族の故郷の島でもないのに、なぜここが選ばれたのかということだ。いくら考えても答えは出ないこの疑問について、のちに友人が言ったのは「それはお前たちが辺境の民、マイノリティ民族だからだ」といったことであつた。

あの時から「マイノリティ民族」という事実が、自分の「批判的」思考に刻まれることとなつたのだが、心が痙攣するほどの悲しみが込み上げはしたものの途方に暮れるばかりであつた。またそれは、無数のマイノリティ民族につきまとう苦難への想像をももたらし、心を苦しめた。

一九七九年帰郷した際、義兄である当時の郷内代表会の主席に「代表会は、なぜ核廃棄物を貯蔵することを拒否しなかつたのか」と聞いてみた。「拒否したら牢屋に入れられる。拒めるはずがないではないか」という義兄の答えは、被植民者であるマイノリティ民族が出した最も卑屈で無力なものには違いないが、このように言う私もただただ心配するだけであつた。

一九八二年五月一七日、一万八本の核廃棄物貯蔵タンクが蘭嶼に到着した。この出来事はタオ族の祖先の島が、文字通り「核廃棄物の島」、「科学に植民地化された島」になつたことを宣言する儀式であつた。不穏な空気が島に漂つた。どうしたらよいのか分からず戸惑いの表情を浮かべた島の人間は、ところかまわず誰とはなしに疑問を口にした。

「核廃棄物とはそもそもなんだろう」

「安全だというが、それならなぜ台湾総統府に置かれないのだろうか」

「なぜ漢民族が暮らす島ではなく、我々タオ族の島が選ばれたのだろうか」

考えても答えが出ない疑問とはいへ、我々は漢民族ではないこと、台湾のなかで最も底辺におかれるマイノリティ民族であることだけは百も承知だ。一九八二年、まだ若輩者であつたこの頃、タオ族のなかで初めて実力で大学に入った筆者は、ケーブルテレビも含めた台湾のあらゆるメディアや雑誌を徹底的に調べてみた。そのすべてが核廃棄物の最終貯蔵所の建設場所をめぐる国民党政府による決断を賢明だと賞賛していた。また「核廃棄物を終結させる場所」として蘭嶼が選ばれたのは、タオ族にとつても大変有利な、現地の経済発展をもたらす素晴らしいことだと繰り返して説明していた。こうした言論が台湾社会に溢れるなか、貯蔵所の建設を蘭嶼に決定したことは台湾政府による最悪な政策、たゞ度胸をもつて発言できる者は、私たちを教育していた漢民族の教師も含めて誰一人もいなかった。この出来事は当時の私にとつては信じられなかつたものであつた。

一九八二年、大学の夏休みに島の六つの部落を回つてみた。戦前生まれの年輩者でまともに中国語を話せるのは一人もいない。蘭嶼郷役所には公務員資格を有する原住民は一人もおらず、師範学校卒の小学校で教鞭をとるタオ族はたった六人、しかも全員国民党の黨員である。学校では「原住民意識」に関する勉強や多民族を知る基礎教育などは「ない」。私が聞くのは、核廃棄物

貯蔵所の建設に反対するならば、それは政府、国民党に反対することであり、蘭嶼の将来に面倒をもたらすだろうということであった。この時、父と交わした会話のことを覚えている。

「核廃棄物って何のこと？」

「さあ」

当時、フランス文学を専攻していた私でさえも核廃棄物とは何なのかを知らなかったから、ましてや先祖代々この島で暮らしていた同胞が知るはずもなかった。

それから一年後、アメリカ政府が一九四七年一〇月にマーシャル諸島で行なった核実験の記事が新聞『中国時報』に掲載された。そこにはビキニ環礁の住民が、長らく暮らしてきた島を強制的に離れざるを得なかったという悲惨な内容が書かれていた。それを読んでまず疑問に思ったのは、マーシャル諸島の住民の未来にいったいだれが関心を寄せるのだろうか、核実験による海洋生物や海洋生態への影響、そして地球という惑星の生命にいったい誰が関心を持つのだろうか、といったことであった。

蘭嶼に核廃棄物を貯蔵する合理性や合法性、また国民党員が絶えず主張する安全論が広がるなか、核廃棄物が蘭嶼に放置されることが決定され、少なくとも一九八七年まで既成事実化していった。島民の立場を本当に考えようとするメディアはひとつもなく、まるで植民地政府の悪行を島人が黙認したような雰囲気がある。また島の人間は現代社会の政治、行政、法に不慣れなこともある。強者による抑圧やいじめを受けても、強い抵抗を考えないば

かりか、ささやかな抗議の方法すら持ち合わせなかった。こうした問題は大学時代の自分を深く悩ませた。

一九九〇年はじめには、台湾電力に代わってすべての核廃棄物を管理するようになった台湾原子力委員会の「物料管理後端運営所」が、蘭嶼で自然科学キャンプを開催した。蘭嶼での核廃棄物貯蔵所の設置をめぐる正当性を憚らずに宣伝した。しかしながら核廃棄物とは何なのかを我々タオ族に説明することはなかった。

我々の土地（訳者注：原住民族保留地）を合法的に借り上げる完璧な書類、タオ族の命、財産などを完全に保障する書類など、具体的なものは何ら提出されはしなかった。台湾政権の下で我が民族の運命はどれほど卑小なものであったのか、そこからも知れよう。

マーシャル諸島のビキニ環礁での二〇数回にわたった水爆実験、スリーマイル事件、チェルノブイリの原発事故など、覇権国家の米ソによつて繰り返された核の実験や事故。彼らによる我々の地球への暴力を国際的に阻止するものはなかった。同じ時期、台湾政府はメディアを利用してながら蘭嶼における核廃棄物貯蔵の安全性を大々的に宣伝していた。徹底的にひどい仕打ちをされても反撃のしようもなく、タオ族はただ黙り続けた。

三

一九八六年、大学を卒業したばかりの私は、台湾原子力委員会が発表した、蘭嶼を核廃棄物最終処分場に選んだ五つの条件について目にふれる機会があった。

- (1) 人口が多い都会から最も離れている場所
- (2) 国による経済的投資が最も少ない場所
- (3) 将来、海に投棄するのに最も効率的な場所
- (4) 最も人口が少ない場所
- (5) 貯蔵所から半径五キロ以内に人が住んでいないこと

実際には、この五つの条件はどれも欺瞞に満ちて、蘭嶼の現実に合致しない。要するに最大の理由は、タオ族がマイノリティ民族であること、戦前も戦後も知識人を輩出することのなかった無力な民族であることが、蘭嶼が選ばれた最も重要な理由なのである。

この頃から私は、台湾政府、原子力委員会、台湾電力が想像もしなかったであろう活動を開始する。一九八七年二月七日、花蓮にある玉山神学院の学生であった郭健平（原住民族名Swann Vengyan）が蘭嶼に帰省し、「タオ族よ、台湾電力に買収されるな」と唱え、郷代表、県議員、郷内代表たちの日本への招待訪問を阻止しようと試みた。一月八日、私は台北の「耕莘文教院」において、核廃棄物を蘭嶼から撤去する趣旨のシンポジウム、「驅除惡魔」（悪霊を追い出せ）を開いた。一九八八年二月には、郭さんと二人で故郷の島の部落を巡回しながら、ピキニ環礁をはじめとするアメリカの核実験の写真をもとに自分たちで作った幻灯を上映した。予想はしたが、国民党員の脅迫があるなかで、

こうした活動にうかがえるのは、郭さんと私のなかで目覚めた

ばかりの民族意識であった。世界の先住民族運動の流れから見れば、我々は遅れたほうだったのかもしれない。植民地的史観からすれば、世界中の植民政府はありとあらゆる手段で、マイノリティ民族の民族運動家たちが掲げる抗議の目的を歪曲し汚名を着せてきた。認識を混乱させ、仲間を分裂させる手段も似ている。マイノリティの民族運動家たちを分裂主義者と規定して、他者（マイノリティ）の人権を侵害する悪行を反省しないどころか、国家の名の下に本来合法でないものを合法化させることで、マイノリティの法的立場を無化してきたのである。国家によるマイノリティ民族への抑圧の事実、世界中のどこにおいても贅言を要しない。

近代におけるタオ族の民族運動史上では記念すべき日となった一九八八年二月二〇日の運動を、我々は「悪霊驅除運動」と呼んでいる。悪霊とは核廃棄物及び台湾政府を意味している。我々の宣言には「核廃棄物を直ちに蘭嶼から撤去しろ」というのがあり、この生存宣言は我々にとって民族運動でもあった。「悪霊驅除運動」は我々の民族による漢民族という植民者への抵抗である。

この日は三度にわたる抗議活動や嘆願書の提出活動を行った。私が総指揮、責任者となつて核廃棄物貯蔵所に立ち入り、交渉した。原子力委員会はとりあえず嘆願書を受理するよう貯蔵所に指示したものの、受取人はいずれも地位の低い貯蔵所の所長や管理署の署長だった。被植民者としてのマイノリティ民族が主張する生存宣言への軽視がうかがえよう。要するに台湾政府や原子力委員会は我々の嘆願などものともせずにはいたるのである。

四

一九九七年一月、私は南太平洋のフランス領タヒチ島で行われた「Abolition 2000 核兵器・原発を廃止しろ」という国際活動に参加した²⁾。イベントの主旨は先住民族の土地や島、環礁における核実験、核廃棄物の運搬、核兵器の保有の禁止を訴えることだった。タヒチの首都・パペーテにも行き、フランスによるムルロワ環礁（1962 - 1995）の核実験への抗議行動にも参加したが、結局、「嘆願書」を受け取ったのは地位の低い役人だった。植民者の傲慢、非植民者の悲哀を想像できよう。民族運動を経験してきた私の目から見れば、タヒチのポリネシア人の境遇は奇しくも我々とまったく同じものだった。小さな島の人たちの悲しい叫びはあたかもフロンティアの祖先の誇りを捨てるようなものだった。

あるマーシャル諸島の友人は、アメリカがその環礁（Atoll）で行った核実験について発表した。それは、マーシャル諸島の人たちが抱えている無力感とアメリカが出した補償金をもらっている若い世代の自らの将来に対する戸惑を述べた話であった。その時、アメリカ合衆国のネバダ州からきたシヨシヨ二族（Shoshoni）の頭目が会議参加者に真面目な顔でこう言った。「我々は捌かれのを待つ羊のようなものだ」。

二〇〇五年初旬、私は小さい頃から訪ねるのを夢見ていた南太平洋のある島へ行くために再び長い旅に出た。台北から英領の島

国クック諸島（James Cook 船長という植民地的記憶が刻印された）のラロトンガ島に一ヶ月ほど滞在した。ある日のことだ。美しい薄黄色をした浜辺を散策していると、二〇匹ぐらいの海緋鯉の内臓を捌いている成年の男性と出会った。魚を見ると海洋民族の血が騒ぐ私は自分から挨拶をして、声をかけた。

「一九九五年六月、フランスがタヒチの南東部二〇〇マイルあたりのムルロワ環礁で核実験を行ったよね。放射線は爆風でここまで飛んできたはずだが、魚を食べることは「人工的な放射線」を体内に入れるのと同じようなもの。食べるのに不安はないの？」

「もちろん怖いよ。しかし一〇年もの間、魚を食べずにいたのだから、体内に放射線を入れてからの運命は、イエスさまに任すしかないさ」

何という無力的で感傷的な答えなのか。

二〇〇七年、私がグアムで開催された環フィリピン海洋地域の文化交流に参加した際は、沖繩からグアムに移転してきたアメリカ軍をたくさん見た。グアムではこう言われている。アメリカ政府はグアムのチャモロ人（Chamorro）から一部土地を奪ったが、アメリカ海軍の秘密基地と称されるそこには、グアムに配備される原子力潜水艦が寄港している。もちろんチャモロ人は世界の超大国に抗議するはずもない。

二〇一一年、蘭嶼の核廃棄物貯蔵所が放射線漏れの事故を起こ

した。一二月三〇日に私は再び四〇人あまりのタオ族とともに蘭嶼から台北総統府に向かった。台湾の最高行政機関である行政院に『核能廃料遷出蘭嶼』（核廃棄物を蘭嶼から撤去しろ）という嘆願書を提出するためであったが、漢民族政権の最高機関を象徴するテクノクラートたちが見せた冷淡さは、マイノリティ民族の悲鳴を無視してきた戦後の植民者の姿そのものである。

『核能廃料遷出蘭嶼』は、抗議活動の嚆矢となる民族運動の最も重要な計画だったのに、行政院經濟部の返答は、現状変更不可というこれまでと変わることのない内容だったのだ。文字を持たないマイノリティ民族の、土地政策の管理と発展を含めた島の将来はすべて植民者によって決定されてしまう。一九八八年から始まった私の抗議活動への参加は、この二〇一一年が最後になった。この二〇数年のあいだ、我が民族は悲痛な叫び声をあげながら数え切れないほどの抗議活動を行ってきた。しかし結果はどれも似たりよったり。我々の民族運動は植民者からみれば、劇場のピエロのごとき振る舞いであって、マイノリティ民族を軽視する漢民族が歴史的に培ってきた態度をついには播さぶることができなかつたように思う。

五

蘭嶼ではほとんどの男性は海と格闘する自分の物語を持っている。私はそれを「海の情動を物語る男」と言う。私を含めて同じ世代の人たちは勉強するために台湾に渡ったが、そのほとんどは都会で底辺労働者として働いた。私たちが小さな島から台湾とい

う大きな島に移動した頃は、ちょうど台湾は後進国から開発途上国となり、経済成長期を迎える時期でもあった。出稼ぎに行った同級生の多くは短期間に金銭的には裕福になったが、それは上の世代にとつては未曾有の経験でもあって、現代社会における「豊かさ」という言葉は、伝統的な豊かさの概念と本質的に違う新たな言葉であった。

蘭嶼のタオ族は、世代によって日本や漢民族による植民地的体験も異なっているため、歴史的反省は異なる世代間のなかで錯綜して形作られ、心の深層に刻印された歴史的な感受性もばらばらに存在している。

私が異民族の文明を学び大人になった時期は、それでも幸せなことに「孤島の文明」が残存していた。島の本来の環境や洋々たる海原に敬畏を払う信仰に触れることができた。二〇〇〇年代になると一九二〇年以前に生まれた日本の植民地教育を受けた世代が凋落するなか、若干の男性たちは一九八八年から始まった「悪霊駆除」運動に参加することができた。しかしながら、「民族運動」への理解が皆無に近い上の世代の彼らがどうやって異民族に抵抗できようか。

我々の民族意識は、支配者に反発するなかで誕生する歴史的産物ではなかった。そのため、上の世代に理解してもらえたのは、せいぜい核廃棄物は悪いものになぜマイノリティ民族の我らの島に放置せざるを得なかったのか、また「国」によって辺境の民と位置づけられることは何を意味するかくらいだ。そもそも我々の言葉には、これまで語ってきたような問題を理解するための語彙すら存在しない。それなのにどうすれば巨大な国家に強要

された政治的犠牲を理解してもらえらるのだろうか。

民族運動の呼びかけ人、中心的な存在として民族のために何ができるのか。一九九六年二月、「悪霊駆除」運動の延長線上で、ある日本語が使えない中国語話者の年配者がこう言った。「私にできるのはタオ族の言葉で祖先の島のためにお祈りを捧げるだけです。あなたの魂がますます遅くなるように」。

一九九七年一月、仏領タヒチのモーリア島で、あるアメリカネバダ州からのインディアンが Abolition 2000 To Eliminate Nuclear Weapons の参加者にこう語った。「マイノリティ民族と強大な帝国との最大の違いは、地球に対する態度である」。

そして、二〇〇三年三月、私の父 Sympen Maneiwan が息を引き取る前に言い残したのは、

「一人息子のお前のために、私の魂はお前のそばに留まる。これからも子孫たちがわが祖先の島のために歌い続けるように」。

六

そつだ。祖先の島のために歌おう。もしそれが叶えられる最もちつぽけな願いであるならば、両親が生前に私に残してくれた遺言をそのまま受け入れることにしよう。彼らが持っている信仰の世界観はこういうものだ。「忘れるな、おまえに教えたクロハネ・トビウオに関する神話を。毎年、トビウオ祭を開くのだよ。年中行事の開催によって漁の文化が秩序よく伝承されていく。それは「海の歌」というものだ」。

私は学校教育から他者の文明を学んだ。民族運動家として大小

の島々を行き来するなか、一番感慨深く思ったのは、上の世代の男性家族が私に守るよう要求した、季節ごとに変わる漁の文化といたった生活の秩序なのだ。簡単にいうと伝統社会における歳事、さらにいうと、海洋民族が持つ島の環境や魚類文化への信仰である。季節ごとに行なわれる歳事という「秩序」はいくら旅の経験が多くても依然として信仰のように私の内心に刻印されている。

台湾では大中華主義の勢力は非常に強く、高校から大学にかけて我が民族の学生たちは「辺境の民族」とされてきた。これまで台湾の政府は政策面では根本的に原住民族たちを軽視していた。今でもそのことを忘れることができないため、台湾的中国主義に抵抗感を覚えずにはいられなかった。幸いなことにさまざまな文化、国家、民族のあいだを行き来する経験によって私は自分を鍛えたり変えたりして、異なる立場にいる自分というものを見直したりする機会に恵まれた。祖先の島に戻ってから漁や家造り、創作、読書をするほか、親の使用言語やその世界観などに直接ふれるように自分にも課してきた。伝統的生活をするなかで父親は再び幼き頃に聞かせてくれた物語や彼の物語を話してくれていた。それは父親自身の「文学作品」であり、その文学はいわば「海洋文学」となるのだ。フランスのカミュの『異邦人』やヘミングウェイの『老人と海』、魯迅の『孔乙己』や祥林嫂（訳者注：作品「祝福」の登場人物）、陳映真の『將軍族』やガルシア・マルケスの短編小説など、それらの作家たちによる名作は私にはよく理解できなくて困惑した気持ちにもなる。なぜなら、そこには「生」の海、「生」の魚を見つけないことができず、虚構の「生の間」ばかりがその文学世界の中心に据えられているから（個人的考えではあ

るが)。父の話ときたらリアルな「海洋文学」であり、聞く度に目の前に海、魚、船などが浮かんでくる。そのすべてが「生」に見えるからこそ、興味が湧いてくるのだ。とは言っても何をもつて「文学作品」と言えるか、いかに創作すればよいかなど、教えてくれる者は誰一人いなかった。

祖先の島で定住する生活を始めてから、よく海に潜って素手で魚を捕るが、一〇斤以上の魚がよく捕れたため、父親とその兄弟二人も頻繁にうちで食事をするようになった。彼らもベテランの漁師で、私は彼らが捕ってきた魚やロブスターなどの海鮮を食べべて育った。そのような経験から、私たちがそれぞれ有する物語は互いに似ている。そのため伝承性があり、また精神的な部分も近い。そんな中で魚の物語は、陸上の生活においては私と上の世代が代々継承していくものとなるのだ。兩世代がそれぞれ日本教育と漢民族教育、つまり異なった教育を受けたものの、使用している言語は同じ祖先のものだ。彼らと共に過ごしたり彼らに物事を習ったりするたくさんの時間のなかで、その語られた「海洋文学」や歌われた歌声はしばしば私を海に誘い込むような映像となる。また人生の先輩たちに教えてもらった海の形や波の起伏は、現在の自分の「文学活動」においてはそれぞれ創作の技巧と構造となつて生かされるのだ。私の文学世界は著名作家による古典を手本にするのではなく、タオ族の先進者たちによつて形つくられてきたのだ。

「辺境」の異民族の成長から見れば、私の経験は屈折しているように思える。「境界人」(marginal man)に伴う多重人格のまま異なる領域の友人たちの間を行き来したり、馴染みのある場所や

国に行つて世界的に有名な海洋科学者と知り合つたりするが、ここでよく語られているのは科学による海洋学の解釈理論であり、タオ族のように文化の立場や人間的感情を持つ存在として「海を理解する」者はいなかった。私が知っている作家たちや文学評論家のなかでも、共に海に対する感情について語り合える相手はほとんどいない。

海は私の文学世界では主役で重要な存在だ。海がなければ私も文学もなくなる。海は台湾の辺境にあるタオ族にとつては集団的信仰のような存在である。世界文学の中では、海も山林も野生動物も魚もすべて生きものだと同様に「理解する」古典的作家はいない。二〇数年以来、この惑星にいる人間はディスプレイチャンネルで放送される動物学的、生物学的映像に慣れている。撮影者はたくさんの時間と精神を費やして「野生」動物やその生物的习惯を捉えようとしている。換言すれば、数少ない撮影者やたくさんの異なる領域の専門家による科学解釈のおかげで、人間はテレビの映像を通して「野生」動物やその動物的习惯を容易に理解できるようになっている。

しかしながら、それによつて果たして人間は、ほんとうにありのままの大自然を知ることになったのだろうか。

台湾文学の分野では私の文学について次のような問いかけがされることがある。シャマンはほんとうに伝統船を造れるのか、船を漕いでトビウオを捕れるのか、斧で樹木を切り倒せるのか、海に潜って魚やロブスターを捕れるのか、海を過剰に美化しすぎていないか、シャマンの文学は魚を代弁しているのだが、ほかのタオ族もそうであろうか、トビウオを捕れるのか。

他方で蘭嶼のタオ族は私のことを次のように考えている。シャマン・ラポガンは何を書いているのだろうか。その作品はほらを吹くようなものじゃないだろうか。修士課程を出て博士課程まで勉強したのはほんとうなのか。すべてが事実だったらなぜ彼は漂泊し続けているのか。

彼らが投げかけ私が受け止めた問いは、「文学」とはそもそも何だということだ。台湾で文学を教える教師たちは私の「野生的海洋文学」を読み解く方法を知らないと思う。それは漢民族の遺伝子のなかに海洋が存在しないからだ。また蘭嶼で漁をして船を造るタオ族の人たちは、「野生の海洋」と共に暮らしているとはいえ、「野生の海洋」を描く物語が中国語、日本語、韓国語、英語、フランス語などで表現される可能性を知らないのだろう。

私は自分のことを、異なる専門領域や種族、島などを跨^{またが}る多様な性格を有する「境界作家」と自称している。フィクションとノンフィクションの区別を前提にしてそのいずれかに自分が属すと考えている作家たちは、私の文学を作品自体の芸術性、海洋や漁業を文学化する本質性の観点で疑っている。また中国語の文法を再構築するのは戦略的な行為ではなからうかとも言われている。

「境界作家」という言葉は次のようなことを意味していると思う。私は多くの文学作品や理論が読めるのに対し、文学理論家や文学者は境界人としての私の海洋文学を理解していない。ほかのタオ族と同様に私は「生」の人間であり、血液にほかの種族が一般的に持っている海洋の遺伝子が流れている。また私は海洋と魚と闘わないかわりに海洋のリズムや海洋生物との「共存」を学

習している。

今回、福岡で開催される「原爆文学研究会」の国際会議に参加する機会に恵まれたのをうれしく思う。講演の内容は以上となるが、どうぞご指導を賜りたい。

最後に、上の世代の海を行き来した家族と今の家族を代表して、七〇年前に広島、長崎の原爆で犠牲者となった方々にこの「海の歌」の歌声を捧げたい（訳者注：国際会議の当日、シャマン・ラポガン氏は「海の歌」を歌って講演を終えた）。

注

1 日本植民地時代の蘭嶼において、父親は皇民化教育を受けた初代のタオ族である。浅井恵倫、国分直一、馬淵東一、瀬川孝吉などの人類学者や民俗学者もその友人だった。

2 A global network to eliminate nuclear weapons 21-27 January, 1997, Moorea, Maohi Nation.